

タネまきと間引き

徳野 雅仁

九月に入ると、秋のタネまきシーズンがはじまります。播種適期はそれぞれに異なりますから、その年の気候の変化や、気象状況に注意しながらタネまきを行います。とくに、結球させるハクサイやキャベツ、ダイコンはまき遅れないようにします。また、関東南部を例にとると、ソラマメは十月中、下旬に。サヤエンドウは十一月上、中旬にまき、小苗で越冬させるようにします。マメ類は早まきすると冬までに苗が大きくなりすぎて寒害を受けやすくなり、遅すぎると冬までに根を深く張れず、寒さや乾燥被害を受けて冬を乗り切ることができません。

土壌に弾力があり、団粒構造が見られる自然栽培実践地や、有機栽培を行ってきた畑では、秋は無肥料栽培を試みる良い機会です。葉菜をはじめソラマメ、サヤエンドウ、ダイコンも耕さず草を刈りとるだけでタネまきができ、よく育ちます。

タネまきは、雨後に行うのが理想ですが、雨がなくても覆土したあと土を押さえておくと、毛細管現象で地下の水分が上昇して土は乾きません。

タネはできるだけ新しいものを。とくにニンジン、チシャ、ネギは短命種子で、採種後一年経つと発芽しません。また、タネには光を感じると発芽が促進する好光性種子と、光を感じると発芽しない嫌光性種子があります。コマツナなど小さなタネほど好光性種子であるため、小さいタネはタ

ネが隠れる程度に薄く覆土し、ホウレンソウ、フダンソウなどは五ミリ、マメ類はやや厚く十ミリほど土をかけます。

播種後に土の乾燥を防ぐ方法としては掌で表土を押さえる以外に、まき溝部分を畝の表土より二センチほど低くしておく、この部分の乾燥は一層避けられ、発芽まで土壤水分を保つことができます。

九月上、中旬まきでは、ホウレンソウやダイコンなど、いずれの野菜も春まきものより子葉が大きくなり、生長も早いですが、これは地温が高いことによるものです。従って、この時期は、苗が混み合わないよう、徒長する前に早めに間引いて、しっかりとした苗に育てます。

間引きのコツは、幼茎が短く太いものを残し、徒長して幼茎がまのびしたものが傷みの出たものを間引きます。間引き作業を楽に行うにはタネをまき過ぎないことですが、ダイコンなどの幼茎の間引き菜はカイワレダイコンとして利用でき、無農薬なら、間引き菜はすべて安心して食べられますから、間引き作業も楽しく行えます。

こぼれタネが発芽したのがみな元気なように、無肥料、無耕耘で発芽した子葉にもいきいきとした生命力と伸びやかさのようなものが感じられます。発芽の美しさに心ときめく瞬間です。

(イラストレーター イラストも筆者)

覆土の厚み

好光性種子はタネが隠れる程度に薄く、嫌光性種子は5-10mmと厚く土をかけます

